

『魂の教育』から「再読」の妙を考える

森本 あんり



大阪梅田の丸善ジュンク堂で最近著『魂の教育』のトークイベントを企画していただき、大型書店の現在をゆつくりと見て回る機会を得た。本屋さんというのは、つくづくたいへんな仕事である。どの本をどういう書棚に並べるか、自分で工夫して決めなければならないからだ。図書館で使われるような学術的な分類法ではない。もつと実用的で、「買手の視線はおそらくここからこう移るだろうな」などと予想しつつ、自然に類書へと視界が広がるように配置しなければならないのだ。「心理学」の隣には「人生相談」、「宗教」の隣には「オカルト」、「哲学」の隣には「論文の書き方」など。それぞれの棚の上には、いろいろとジャンルの括りが掲げてあって、なかにはわたしのまったく知らないカタカナ語もあった（「アセンション」って何？）。トレンドの移り変わりにも敏感な目配りが必要ということだ。

圧倒的な本の壁の間を歩きながらわたしが思いを巡らせていたのは、さて今回の自分の本はどんな棚に配架されたのだろうか、ということだった。「神学」なんていう棚は日本の書店にはないから、たぶん「宗教学」か「キリスト教」だろう。「哲学エッセー」とか「読書案内」の一角かもしれない。「大学論」や「比較教育」、「アメリカ留学事情」とかもあり得るな……などと思案しつつ、

わたしが内心秘かに怖れていたのは、もし売り場で何かの勘違いがあつて、「女性の自己啓発」とかに入っていたらどうしよう、ということだった（著者は男性です）。

この秘かな怖れは、わたしの人生に今もついて回っている。それを書いたのがこの本なので、本書はいわば著者名が内容の一部になった奇妙な入れ子構造をもつ。ともかくわたしは、自分の本がその棚にないのを確認して安堵し、ようやくイベント会場へ向かうことができた。あとで今回の仕掛け人Fさんに配架の難しさを尋ねたら、「ジャンル分けに困るのはよい本です」と慰められた。何の迷いもなくぴたりとジャンルが決まる「ど真ん中」の書物は、往々にして内容も想定範囲内に留まる、ということらしい。

森有正を扱った章に書いたことだが、読書は本と読み手の共同作業である。わたしはちょうど二十歳の頃、森有正に出会って思索の深みを知り、自分の内面にわたしだけの世界を築く作業に没頭することができた。ということは、この本を読む方々の心にも、それぞれ独自の内面世界との対話が生まれる、ということだろう。自分の生育史と重ねて読む人もあるだろうし、

取り上げられているのと同じ本を読んだときの自分を振り返って追体験することもあるだろう。こうして本は幾重にも波及して読書体験の輪を拡げてゆく。

自分自身のかつての読書体験を追体験する、ということもある。わたしも本書を執筆中に何冊かを再読した。面白いことに、昔読んだ時には特段の感慨をもたなかったのに、歳が進んでから読むとぐっと心に迫る本がある。それは明らかに読み手であるわたしの状況が変化したからだろう。本は、それ自体で完結した物体ではなく、読み手次第で七変化する不思議な生き物だ。シェイクスピアの『ロミオとジュリエット』だって、青年時代に読めば恋心を焦がす悲愛の物語だろうが、年頃の娘をもつ身になって読めば、両家の親の心情にもちょっとは肩入れしたくなる、というものである。

ある本を再読するということは、つまり自分を再解釈することだ。当時の自分を人生のステージの一つに位置づけ直して、今の自分から再検証することでもある。だから、若い人に伝えたい。歳を取ってからこの愉楽を味わうためにも、本は若いうちに読んでおけ。

逆に、かつて宝物のように貴重な言葉が満載だったのに、今の自分にはちっとも響いてこない、という本もあった。たしかに読書は本と読み手の共同作業なのだから、そんなことがあっても当然だろう。だがそれにしても、わたしは自分の無感動ぶりを何となく承服できなかった。というのも、それはあれほど熱を入れて読んだ森有正の本を再読したときに起きたことだからである。いったい自分はどうしたのだろう。

実は、その理由も半分わかっている。再読したのが自分の本

ではなく、図書館で借りてきた本だからだ。わたしは、研究室を出るときにあらかた本を整理してしまった。森有正の本は、一冊を残してみな古本屋行きになった。だが、今わたしが書いたような意味での「再読」は、他人の本ではできない。自分が以前に読んだその本と物理的に同一の本じゃないとだめなのだ。なぜなら、そこにかつて自分が読んだ形跡が残っていて、いかに幼稚な読み方であったとしても、その本と格闘した自分がそこに浮かび上がって見えるからだ。

つまり、本はコンテンツだけではない、ということだ。こんなことはあたりまえ過ぎて書くのも恥ずかしいのだが、本は、そこに印刷されているテキスト内容さえあればよい、というものではない。だから最後に一言。みなさん本は借りずに買いましょう。本屋に行つて勢揃いした本を眺め回し、人類の知の蓄積に圧倒されながら、自分で本を買って読みましょう。本屋さんがんばれ！



『魂の教育』

岩波書店・3,190 円